一〇・四以降の情況

—存否が問われた明大全共闘—

九・三〇の日大奮還闘争は明大学館を中心に展開されたが官憲の包囲の壁が厚く、われわれ全都助手共闘会議は集会に参加することができなかつた。しかし、曲りなりにも闘いの環を広げ連帯することを闘いとつたことは評価しなければなるまい。この九・三〇の全都助手共闘の結成大会において発言があつたように、一九六八年から闘争が開始されている大学とそうではなく、一九六九年の段階で漸く闘争が開始された大学における状況には可成りの位相の差が存在していた。この段階では、日大・東大をはじめとする先駆的役割を果してきた大学では八・四の大学臨時特別措置法が強行採決された以降急速に自主解決という名で全共闘運動の圧殺の方向に大学当局は指針をとりはじめていた。したがつて、本学の状況と比較してもそれなりの差があつた。これらの状況の差異は自ずから、全都助手共闘結成の評価の差となつて現象した。何のために全都助手共闘をつくるのか、その目的が不明確だという意見が相当あつた。個別明大助手共闘も大同小異の発言をした。何故斯様な発言をしたかと云えば、一〇・一から明大は夏季休暇が明けて表面では授業再開の日であつた。そして、われわれ助手共闘は、生田地区の教職員・助手・院生・学生の全体集会を呼びかけていた。農工学部長及び事務長を通して集会を呼びかけた。この集会を計画した裏には大学当局は一〇・一〇までの間に官憲を導入してロックアウトするだろうと読んだからにほかならない。したがつて、斯様な状況で居て、全都助手共闘結成による運動の実質的高揚が考えられなかつたのである。冒頭にも既述したように、全都助手共闘会議結成宣言にもあるように、われわれのこの組織を中心にして多くの教員層に呼びかけ特に情報の交換を活発に行ないつつ、街頭カンパニア闘争では全都助手共闘の旗の下に結集して闘おうという類のものである。

一〇・一の生田地区全体集会は九・二九の段階までは教員の幾人かは参加すると回答されていたが九・三〇の日に「対策本部から、参加して貰つては困る」といわれたと云うことで全員断つてきた。そして、実際参加したのは学生・院生一五〇名余りと、助手共闘と教員二名に過ぎなかつた。われわれは、教員の主体性のなさに憤りを禁じえなかつた。この一〇・一の集会を含めわれわれ助手共闘はこれまでに左記の集会を主催してきた。

九・一二　院生助手討論集会　（生田）
九・一六　全明教職員・院生・学生・助手討論集会（生田生協食堂）
九・一九　院生助手討論集会　（生田）
九・二一　全明教職員・院生・学生・助手討論集会（本館体育館）
九・二八　全明教職員・院生・学生・助手討論集会
（本館六二二教室）
九・二八　午前中は、教員討論集会（記念館貴賓室）
一〇・三　全明教職員・院生・助手討論集会（記念館）

われわれ助手共闘は、これらの集会を通して学生から問われている問題を明らかにすると共に、それらを自らの問題として受止め、思想的深化をはかると共に、問題の発展止揚を思策してきた。そして、非常に雑な形であつたが、一応われわれの見解として「明大闘争の総括と展望—安保・沖縄闘争の新たなる高揚のために—明大生田助手共闘会議編」を九・二八の全明討論会の席上で公にした。特にこのレポートを中心に議論が展開され、評議会運動について検討が進められるようになるのは一〇・一以降であつたといつて良い。既に述べたので割愛するが、特にここで一言しておきたいのは、われわれは現在（当時）の大学闘争を反体制運動として捉え、われわれ研究・教育労働者にとつてみればすぐれて階級闘争であると捉えたが故に、大学闘争の持続的発展の保証を無意識的に欠落させた街頭カンパニア闘争至上主義に対し批判を展開せざるを得なかつた。そして、この大学闘争の持続的発展を保証する戦線としての評議会を提唱した訳である。しかし、この運動は未経験なものであるが故に、その内実と思想的位置づけが不明瞭であるという意見も聞かれたことは事実である。これらのことが、一〇・三の全明討論集会の席上で濃縮された形で出された。評議会運動は、まさしく労働者・市民学生と国家権力との妥協のない闘いとの関連においてはじめて創出可能であると云うのがその主旨である。ここで留意しなければならないのは、学園闘争から政治闘争へ、という従来（一九六〇年まで）われわれが使用した論理は少なくとも一九六〇年代の後半からは不毛になつたという認識である。個別学園闘争の場に直接国家権力が介入し、大学闘争が国家権力との対決を避けて貫徹できないことが一九六九年に入つて明白な事実となつた以上、個別大学闘争を反体制運動として闘い抜くことが必要であり、これを抜きにまた大学の改革もあり得ないことを認識しなければならない。

いみじくも、大学当局（日共が領導）は一〇・四の全明集会を呼びかけるに当つて、最早や現在の状況は個別明大内の問題として解決することは不可能になつてきた、政治闘争（革命運動）として進められている以上どうすることもできない、由のことを公にした。この大学当局の状勢分析はこの限りでは正しいと云わねばならない。しかし、認識論は根本的に否定されるべき類のものである。何故なら、運動が政治闘争の質をもつてきたから、大学はどうすることもできない、という場合、「大学」についての概念が明らかにされねばならない。大学は理論だけやるところで、実践は大学の外でやるべきだという倭小な素町人的・俗物的な発想にもとる『大学』の規定もあるが、もし、「大学」を斯様なものとして把えているとすれば、その大学こそ粉砕の対象となつていることを明言してはばからない。

実践とは何か。自らが探求し続けている真理を社会的に明らかにすることも実践であるだろうし、直接その真理を具現化することも実践である。コペルニクスは天動説を批判し、地動説を唱え、国家権力から弾圧されざるを得なかつた。コペルニクスは政治運動をやつたのではない。学問研究をプロパーにやつたが故に政治・国家社会の存否にまで波及することになつたのである。そして、学問研究から出発してついに学問の自由を守る（闘いとる）ためにこそ彼は運動をしなければならなかつた。まさに、われわれは現在、同位相に立脚していることを自覚すべきときである。若し、コペルニクスが、国家権力の弾圧に屈していたとすれば、それは学問研究の死滅を認めたことになるだろうし、真理探究の道は体制の許容する範囲においてしかないことになつたろう。それは、ナチス政権下にあつても、軍事研究をはじめとする研究者の自由があつたことと何等変るところのものではない。

ひるがえつて、現在の学園紛争を見るとき、「大学」そのものの存否が問われていることに感を新たにするものである。学問研究の自由があるように見える現在社会のメカニズムを綴密に分析するとき、自らが自由と考えていたものが実は現在の体制（階級支配と民族支配）を支える大きな役割を果していたことが認識される。そして、研究者がこの矛盾を国家権力から許容された範囲内で実践する分には何ら社会的に影響がないが故に放置しておくが、いつたん社会的に影響が出るような形で実践すると正面から弾圧してくることは過去と現在の事例を見れば明らかなところである。若し、学問研究の自由を、権力から与えられたものとして捉えているとすれば、それは間違いであると云わねばならないだろう。自由は闘いとることによつて得られるものであつて、如何なる体制からも与えられるものではない、と云つておきたい。学生自身が、体制の内なる大学を否定し大学を否定する自己を否定することによつて、自己の日常性を否定し続けている。したがつて、認識は深化拡大し実践は体制の枠を越えて展開し、国家を対象として超克すべく運動が発展止揚する。この実践の弁証法的発展を阻害する型で従来の「大学の理念」があるとしたら、まさに、「大学の理念」こそ変革されねばならないものだ、という認識に到達するというのがオーソドックスな認識論なのではないだろうか。何か絶対的な大学の理念というものがあつて、その理念に照らして創出するものはすべて「大学の任務外」だとする論理は、まさしくドグマにしか過ぎないし、この絶対主義こそ現在の闘争の破壊対象となつていることを認識しなければならない。大学は過程において存

在するものだと考える。

大学当局は、以上の様に「大学」を捉え、従来の理性の枠から一歩も踏み出すことをしないでこの問題に対峙しようとしたときから、状況分析に基づく対応から、一党一派に属した党派的方向でしか学生に応じられなくなつたと云わねばならない。したがつて、一〇・四の集会も、「政治問題だから個別明大でどうにもならない」と云つた以上、何等内容的に期待しないばかりか流会することを望んだのである。政治問題であり、大学が政治問題を実践するところではない、という認識論を前提とするならば、大学を閉鎖してまわりの静まるのを待つ以外にない。しかし、それではあまりにも社会的に体裁が悪いので、一応集会を呼びかけ、それを流し、如何に当局が努力しても学生が応じないから止むを得ずロックアウトした、というプロセスを考え付くのは当然すぎる程明確な論理なのである。そして一〇・四の集会の流会のあと、対策本部会議は事務職員を排して開かれロックアウトを決定したと伝えられているし、執行については学長一任ということになつたことも公然としている。われわれ助手共闘は一〇月一日の段階で官憲の導入によるロックアウトを察知したが、日曜明けの月曜の明方だろうと考えた。九日に入るということについてはわれわれも明確に把握できなかつたし、対策本部の全員にも知らされていなかつた。それは、「官憲を導入」するというよりも、一〇・一〇の集会を事前に弾圧するために国家権力の要請によつてロックアウトが用意されたからにほかならない。国家権力は、諸般の事情から見て全都段階で統一行動のない九日を選んで大学に乱入した。したがつて、官憲の導入については決定していたとしても、具体的に何時入るかについては七日か八日の段階で教授会メンバーに知らしめられたと考えるのが妥当であろう。しかし、これでは教授個人に何時もの逃げ道「知らなかつた」を与えることになるので、少なくとも農工学部の過半の教授には七日段階で電話（生田地区共闘から）連絡したのである。よつて、九日のロックアウトは一部の教授にあつては緊急教授会（八日）の前に既に知つていたことになる。それでも、何一のロックアウトに抗議する意志表示がなかつたことは周知の通りである。

われわれ助手共闘のうち、九名は八日の夕刻から校舎の一部（農場本部）に泊り込んでロックアウトに備えた。また、われわれと行動を共にしてきた法学部の福井助教授は和泉校舎の一室に泊り込んだ。しかし、福井助教授は官憲ならぬ法学部教授会メンバー二名によつて強引に九日の早朝かつぎ出されてしまつた。われわれは生田校舎正門にて、高木工学部長が官憲に見守られて退去命令をハンドマイクで伝えているのを聞き、その最終警告と共に正門に向い白いヘルメットを被つた教官団と職員に憎しみを叩きつけた。「腕章をつけていない者は教員でも逮捕する」ことになつているから出てくれ、という小宮事務長と吉本教務委員の言葉によつて、われわれは門外に出ることにした。少なくともわれわれはこの事態を八日の教員懇談会（本郷学士会分室：教員有志）の席上においても予測していた。それにしても、実際この状況を目の前にすると怒りにふるえ、或る者は目に涙さえ浮かべていた。この状況を、如何なる立場で経験するかということは今后大学に籍を置く者にとつて重大なことである。考え方の違いとか、人間それぞれの生き方があるとか云う言語は空しい響きしかもつていない。この日（一〇月九日）を迎えるまで、教授会メンバーは何をやつてきたと云うのだろうか。われわれはそれぞれの感じ方ではあつても、われわれ以外の教授会メンバーとの非和解的断絶を確認した。この気持は断絶という言葉で云いつくせないものなのかも知れない。

この日を契機にわれわれの立場は明確化された（ビラ〝全明教職員・学生に訴える〟一九六九・一〇・一三明大助手共闘発行〝）。このことは、全共闘の学生諸君においても同じことである。大学当局が、話し合いの相手を全共闘から学生一般に切換えた一〇・四全学集会の際には明大における全共闘の存否が問われたのに対し、全共闘は一、〇〇〇名以上（独自の組織力）の動員をもつて答えた。しかし、反面組織実態の脆弱性を暴露したが、一〇・九のロックアウトを境に真の全共闘の内実が問われた。徹底抗戦かエスケープかという戦術論争が八日の深夜から九日の明け方まで続いたことは重要なことである。全共闘は、憎しみをもつていた大学であつても完全なる破壊をなしえなかつた。ここに、研究学徒の置かれている苦悩に満ちた立場があつたと告白できよう。自己否定は日常性に立脚しつつその日常性を否定するものであつてみれば、この苦しみこそこの闘争で自らに荷せられねばならないものであるといえよう。

一九六九・一〇・九この日は、斯様な意味においても歴史的に記念されるべき日なのである。そして、この日からわれわれは学内（ロックアウト内）に入ることを拒否してきた。それは腕章をつけずに学内に入ることの当然の権利を主張するが故に、大学の秩序に従うことを拒否したものであり、単に学内に入ることを拒否しているものではない。

われわれは、農場本部の建物に本部を移し、われわれの情宣活動を進めている。この一〇・九以降の情況で特徴的なのは、一〇・一〇の統一集会に明大全共闘は一、八〇〇名あまりの動員をしていることと、教員の反動的動きが活潑化してきたことであろう。教員の動きは依然として没主体還元的であり問題にならないが、職員は「何故研究室を壊さないで事務室を壊したのか」と云つて怒つている姿は哀われである。この発言が、何を物語るかについては多くを語る必要はあるまい。

この闘争の中で、自らの問題を確認しえなかつた教職員のたどる道は、唯一つであることは明白である。それは正常化という旧来秩序への復帰以外の何物でもない。積極的に、バリケードの中にはいつて学生と話合おうとさえしなかつた全教官が、一〇月二七日、一〇月二八日の両日（工学部にあつては）研究室の整理点検のために、腕に腕章を巻いて学内にはいつた。ここに、現在的教員の真の姿があるように思う。

学園反乱の個別性と普遍性

一　序

七〇年前夜。全国の大学そして高校に反乱の嵐が、吹き荒れた。否現在も、又明日も吹き荒れるであろう。反乱の質が単なる個別的な面ばかりでなく、質的に普遍性を持つたが故に、安保といつた枠のある、なし、にかかわらず、洋の東西を問わず、世界が一つの環でつながつている事を示している。仏の五月革命、米の黒人、反戦を中心にした大学問題、西独でも、戦後世界史が、質的に転換して行くとしたらこれらの潮流によつてであろう。

その様な情況にある学園反乱の質を明確化させる意味で、この文章を進める。残念ながら、第一次羽田闘争を間にして、四年間を学生で過した私は、反乱側に位置していたわけではない。最初の二年間は逃避的ノンポリとして、次の二年間は消極的ラジイカル（全体の相対値として）として存在していた。しかし学生として決して、学園自体とそれを取り巻く諸問題に、無関心で居たわけではない。第二次羽田ではんのわずか、エンタープライズ闘争では、東京の支援闘争に、そして一〇・二一国際反戦デーに（一九六八年）は平和三人委員会として、参加した。そんな私が、学園反乱全般に亘つて、冷徹な情況分析をなし得るわけではない。第一次羽田闘争で、山崎君が死んだとき、その追悼式で彼に花を捧げた時、自分自身の心の中の一部∧あるいは全部かも知れないが∨つまりエゴ的な面、やらねばならないのだが結局、何一つやらない心は、殺されねばならなかつたのだ。たとえ全面的に殺せなくても止揚すべく、何らかの努力をしなければならなかつたはずなのに、戦前の日本でも、戦争反対、軍国主義反対をたとえ小さな声でも、叫べた時はあつたろうに、日本人一人一人が、それをやらなかつた報酬として、親兄弟をも戦死させてしまつた。アメリカでさえも、徴兵カードを自から焼く人々が居る。それでも戦争は続くし、戦争反対をさえ言わない人がいる。言わない事によつて、暗黙の内に支持している事に気付かない。「声なき声」も声をあげる必要があるのだ。学園の中でも、学生が武装したりすると∧暴力∨さえしなければ、自分もやるのにと、暗に自己の問題なのに、いわ